『時代の鏡』諸写本研究序説

Introduction to Research on the Manuscripts of
*Mir'āt al-zamān*橋 爪 烈^{*}
HASHIZUME Retsu

ABSTRACT *Mir'āt al-zamān* is one of the most enormous chronicles among Arabic historical works; it was written by Sibṭ ibn al-Jawzī in the 13th century. This work has been regarded as one of the most important sources of history contemporary with the author and has the further value of containing other historical works which have already been lost. Nevertheless, *Mir'āt* remains unedited except for some small parts and has scarcely been examined philologically yet.

Therefore, in this paper I examine *Mir'āt* philologically and start on the classification of its manuscripts into groups.

The first fruit of this paper, is a table of the 111 known manuscripts of *Mir'āt*, together with their bibliographical information, I was able to classify many of the manuscripts as belonging to one of two groups, though many I have been unable to classify yet.

I investigated the features of these two groups of manuscripts. As a result, it develops that one belongs to an abridged edition of *Mir'āt* which was compiled by al-Yūnīnī, the other belongs to an abstracted version which was compiled by an anonymous editor. Although the latter has been regarded as a copy of an original text of *Mir'āt* in former research, I point out the error of this conclusion. I have been unable to discover any copy of the original text among the 111 manuscripts.

Thus, as I point out, the manuscripts of *Mir'āt* which have been used for historical research on medieval western Asia are not those of *Mir'āt* itself, but are historical works abridged from original in a later period. In other words, medieval western Asian history has never been examined using *Mir'āt* itself.

* 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

Ph. D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

I. はじめに

13世紀中葉にスィフト・イブン・アルジャウズィー Sibṭ Ibn al-Jawzī (以下スィフト) によって著された『時代の鏡』は、著者の死亡年である 654H/1256 年までの出来事が書き綴られた一大歴史書として知られている。同書はこれまで、特に十字軍研究やセルジューク朝期の歴史研究等に用いられ、またその歴史叙述の方法が後のマムルーク朝期の歴史叙述に取り入れられたとする見解が示されるなど、⁽¹⁾ アラビア語史書の史学史を考える上でも重要な歴史書といえる。また同書は、多くの散逸史料の内容を保存しているという点でも非常に重要な書物である。⁽²⁾

しかし、同書は部分的な校訂本を有するのみで、⁽³⁾ 現在に至るまで包括的な史料研究・写本研究の対象とされず、その全容は明らかにされていない。その理由として、写本の数が多く世界各国の図書館に散在しているため、その収集・閲覧が困難であることや各写本の有する性格についての考察が不足しており、底本となる写本さえ定まっていないことなどが挙げられよう。また若干存在する先行研究は、『時代の鏡』全写本の情報を基に行われていないため、信頼性が低いことも指摘できる。

本稿では、以上の状況を踏まえ、『時代の鏡』写本の文献学的考察を行う。まず、確認し得る限りの『時代の鏡』写本の書誌情報や内容に関する情報を収集・整理し、写本の分類作業を行う。次に分類した情報を基に、先行する『時代の鏡』研究や解説の情報と照合し、より正確な『時代の鏡』写本の性格や特徴を明らかにする。これらの作業は、『時代の鏡』の包括的な史料研究の第一段階にあたり、今後同書の史料価値を定め、歴史研究に供するための前段階の作業としての意義を有する。

II. 著者スィフトと『時代の鏡』の概要

1. 著者

『時代の鏡』の著者スィフト Shams al-Dīn Abū al-Muẓaffar Yūsuf b. Qizughlū b. ‘Abd Allāh 通称 Sibṭ Ibn al-Jawzī は、581H/1186 年にバグダードで生まれた。通称が示す如く、彼の母方の祖父は、高名なハンバル派の法学者で、多作な著述家としても知られるイブン・アルジャウズィー Abū al-Faraj

‘Abd al-Raḥmān b. ‘Alī Ibn al-Jawzī (d. 597H/1200) である。スィプトは幼少時にこの祖父に学び、『時代の鏡』にも祖父からの情報を多数引用している。その後、ダマスクスへ移住、アイユーブ朝スルターンたちと親交を結ぶ傍ら、説教師（ワーズ *wā’iz*）⁽⁴⁾としても活躍した。654H/1256 年ダマスクスで没。享年 73 歳であった。

2. 『時代の鏡』 概要

正式名称は『貴顕たちの歴史における時代の鏡 *Mir’āt al-zamān fī ta’rīkh al-a’yān*』である。本書はスィプトの歴史理論から書き起こし、天地創造や諸預言者についての記述を経て、著者の死亡年までの歴史が書き綴られた普遍史である。

その特徴を同時期の普遍史として有名な『完史 *al-Kāmil fī al-ta’rīkh*』⁽⁵⁾と比較すると、両書とも編年体形式だが、『完史』は各年の出来事の記述に多くの頁が割かれているのに対し、『時代の鏡』は、年毎の出来事に加え、各年の死亡者の死亡録や彼らの詩や著作の紹介にも頁が割かれており、相対的に出来事の記述量が少ない。また、『完史』が東はマーワラーアンナフルから西はアンダルスまで、広範囲を扱うのに対し、『時代の鏡』はイラク、イラン、シリア、エジプトの歴史を中心に扱い、その範囲が狭いという特徴を有す。

3. 研究史

『時代の鏡』は『十字軍史料集成』において、アラビア語原文とそのフランス語の対訳が示され、初めてその内容が紹介された。⁽⁶⁾そしてその史料解題の部分に、著者スィプトが散逸したヒラールの歴史書などを参照し、その内容を引用していること、その引用方法は原典を一字一句違えずに引き写すものである⁽⁷⁾との指摘がある。

次にジェウェット J. R. Jewett を挙げよう。彼は L19-a の序文において、大英図書館所蔵の『時代の鏡要約 *Mukhtaṣar mir’āt al-zamān*』（以下『要約』）とされる写本が、実際にはスィプトの原著『時代の鏡』⁽⁸⁾の改訂・増補版であると指摘する。さらに、その底本となった no. 94 は上記の『要約』とは種類の異なる『時代の鏡』⁽⁹⁾写本であるとする。

その後、カーエン Cl. Cahen は、ジェウェットの見解に拠り『時代の鏡』に

は二系統の写本が存在すると指摘した。彼は no. 94 の他、イスタンブールのトルコ・イスラーム芸術博物館所蔵の no. 36～47, 50 (Evkaf 分類) や no. 63 が、スィブトの原著を忠実に書写したものとする (以下「原著の写し版」)⁽¹⁰⁾。もう一種類については、ユーニーニー al-Yūnīnī⁽¹¹⁾によって編纂された写本群で、こちらの方が現在大量に流布しているとする⁽¹²⁾。さらに彼は二系統の写本群の記述内容に違いがあることを指摘し、その併用の必要性を説く⁽¹³⁾。

これらの研究を受けてグオ Li Guo は、ユーニーニー著の歴史書『時代の鏡補遺 *Dhayl mir'āt al-zamān*』(以下『補遺』)に関する研究書の中で、ユーニーニーによる『要約』作成作業についても考察を加えている。それによると、ユーニーニーは 690H/1291 年以前には『要約』の編纂作業を終え、また『要約』は『時代の鏡』の内容から、明らかな加筆や削除がなされているという。加えて、グオの最も重要な成果は、『要約』とされる写本をリスト化し、トプカプ宮殿博物館図書館 Ahmet III 分類 d の諸写本など、ハキーミー Aḥmad al-Ḥakīmī によって書写された写本が、纏まった形で参照できる最古の『要約』写本群であることを指摘した点にある。さらに彼は、むしろ『要約』はユーニーニー自身の作品であるとする⁽¹⁴⁾。なおジュエット、カーエン、グオ共に『要約』写本は、字義通り原著を「要約したもの」ではなく、原著を「増補・改訂したもの」と考えている。

最後に、筆者は [橋爪 2005] で、no.102 の著者名・題名を、『時代の鏡』諸写本の記述内容を比較することで確定し、no.102 がスィブトによって著された『時代の鏡』の写本であること示した。またその際用いた写本の内、大英図書館所蔵 no. 74 が他の諸写本とは記述形式や内容が異なることを指摘し、二系統の写本群の存在を別の角度から裏づけた⁽¹⁵⁾。

以上の研究を纏めると、『時代の鏡』という歴史書には記述内容の異なる二系統の写本群が存在し、一方はスィブトの原著『時代の鏡』を忠実に書写した「原著の写し版」であり、もう一方はユーニーニーによって原著に改訂・増補などが加えられた『要約』である。

4. 『時代の鏡』諸写本の書誌情報

まず本稿で扱う『時代の鏡』諸写本の基本的な書誌情報を提示する。

稿末の(表 I)を参照されたい。現段階で判明している『時代の鏡』111写本に⁽¹⁶⁾

番号を付けた上で、写本略称、巻数、葉数、書写年、記述範囲、形態、書写者名を記し、備考欄には情報源を示す番号を（表Ⅳを参照）、マイクロフィルム等で内容まで確認した場合には○、そしてその結果『要約』の場合は **M**、「原著の写し版」の場合は **A** と示した。⁽¹⁷⁾

次に（表Ⅱ）を参照されたい。この表は111写本の内、書写年が判明しているものを年代順に並べた表である。書写年の不明な写本は一番下に記し、また年代が不明で世紀のみが判明している写本についても、各世紀毎の欄の下に記した。これを見ると、ヒジュラ暦9世紀に書写された写本が最も多く、次いで8世紀となる。⁽¹⁸⁾

最後に（表Ⅲ）を参照されたい。この表は巻数で区分したものである。これを見ると同じ巻数でありながら、記述範囲の異なる写本が多数存在することが分かる。因みに、イブン・ハッリカーン Ibn Khallikān やユーニーニーはそれぞれ『時代の鏡』が40巻乃至37巻存在したことを伝えているが、現段階では20以上の巻数を有する写本が存在しないため、この表は1～20巻で区分している。⁽²⁰⁾ また、Ahmet 2907/a のように同じ分類の写本を縦列に配しているが、例えばカーエンによって「原著の写し版」とされる Evkaf 分類の諸写本をみると、第5巻と第6巻（no. 40, 41）の間で記述年代が重複しており、一揃の写本として作成されたものではない可能性が高い。従って、同列にあるからといって、それらが一揃の写本群であるとは限らないことを申し添えておく。⁽²¹⁾⁽²²⁾⁽²³⁾

III. 『時代の鏡』写本について

先行研究は『時代の鏡』と呼ばれる歴史書の写本が二系統存在することを指摘している。しかし、その二系統をそれぞれ「原著の写し版」と『要約』であると規定することの妥当性については疑問が残る。何故なら二系統に分類する基準が明確ではないからである。そこで、本章では「橋爪 2005」で行った比較検討作業を基に、先行研究が指摘する二系統の写本の分類基準を設定する。⁽²⁴⁾

1. 分類基準の確定

拙稿「橋爪 2005」において筆者は、no. 102 の著者名・題名を明らかにする際、同写本を no. 28 の他、no. 12, 13, 60, 及び no. 74 と比較した。その結果、no. 12, 13, 28, 60, 102 は同一系統の写本であること、またそれらの写本と no. 74 に

は明確な違いがあることを指摘した。

拙稿で示した二系統間の明確な違いとは、(一)他史料を引用する際の典拠明記方針の違い、(二)1年分の出来事に割かれる記述量の違いの二点である。これに、(三)スィプトの発言を示す際の表現の違いを加え、以上の三つの基準を詳しく検討する。

まず(一)について、グオが『要約』に分類する no. 28 と no. 74 を比較する。no. 28 では他史料の内容を引用する際に典拠を明記せず、いきなり文章を書き始める場合が多い。例えば、no. 28 の 405H 年の条において f. 31a l. 7 (31a 葉 7 行目を示す、以下同) から始まる記述は、ファーティマ朝カリフ、ハーキムの習慣について書かれたものであるが、

ハーキムは夜、馬に乗って諸々の市場を巡ることを好んだ。また、諸々の小路に探索の者を配し、彼等が見聞きしたことを自らに告げさせた。云々
となっており、一見著者スィプト本人の文章のように思われる。

しかし、no. 74 の該当箇所 (f. 200b l. 25～) を見ると、

ヒラルル・ブン・アッサービー曰く、「アブー・イスハーク・イブラーヒム・ブン・アルハダルが私に以下のように伝えた。すなわち、ハーキムは夜、馬に乗って諸々の市場を巡ることを好んだ。以下同文」

と全く同じ文章であるが、出典が明記されている点で no. 28 と異なっていることが分かる。筆者が no. 28 と同系統であると判断した、405H 年の条を含む他の写本の該当箇所を見ても、ヒラルルからの引用を示す記述は見当たらない。

このような例は枚挙に暇がない。no. 28 と no. 74 の 2 写本において、ヒラルルからの同一記事を引用している箇所は47箇所ある。その内、no. 28 にヒラルルからの引用が明記されるのは16箇所のみである。すなわち no. 28 においてヒラルルの引用を示す割合は no. 74 の約3分の1である。因みに同じ比較をヒラルルの母方の親戚サービト Thābit b. Sinān 及びヒラルルの息子ガルス・アンニウマ Ghars al-Ni'ma からの引用箇所で行うと、no. 28 には、サービトからの引用箇所が58箇所中19箇所、ガルス・アンニウマからの引用箇所が25箇所中6箇所明記され、それぞれ no. 74 の約3分の1、4分の1の割合になる。

以上から、no. 28 の系統は no. 74 の系統と比較して、引用の際の典拠明記が少ない傾向にあることが言える。また、no. 74 の典拠明記については、その引用箇所の終わりも明記される場合があり、「以上がヒラルルの言である」などと記

述されている。しかし、no. 28 系統の写本には、引用箇所末尾を示す文言は付されていない。

次に(二)について、記述量の違いに関しては[橋爪 2005]で詳しく検討しているのでそちらに譲るが、no. 74 の記述量は比較した no. 102 の約 3 分の 1 と、明らかに少ない⁽³¹⁾。

最後に(三)について、no. 28 中、著者の発言を示す表現は「著者曰く——神よ、彼を嘉し給え——qāla al-Muṣannif—raḥima-hu Allāh—」である。「著者」と三人称で記していることから、「この箇所以下は著者の発言である」ことを示した編者、或いは書写者による表現であることが分かる。また、死者の幸福を願う祈願文が後ろに挿入されていることから、著者没後の作品か書写であると分かる。一方、no. 74 中での著者の発言を示す表現は「私は言った qultu」という単純なものであり、一人称であることや「私」の後に死者への祈願文が挿入されておらず、no. 28 の系統とは異なることが分かる。

以上から no. 28 の系統の特徴は、引用の際の典拠明記が少なく引用終了箇所の明記もないこと、記述量は no. 74 の系統と比べて多いこと、さらにスィプトの発言を示す表現は「著者曰く qāla al-Muṣannif (—raḥima-hu Allāh—)」と三人称で示されていること、と纏められ、これが二系統に分類する基準の一方となる。

他方 no. 74 の系統の特徴は、引用の際の典拠明記が多く、引用終了箇所も明記されること、記述量は no. 28 の系統と比べて少ないこと、またスィプトの発言を示す表現は「私は言った qultu」と一人称で示されていること、と纏められ、もう一方の分類基準となる。

2. Yale Landberg 136 (no. 94) 写本の分類について

前節では筆者の以前の研究を基に、先行研究で示された『時代の鏡』写本の二系統の特徴を列挙し、両者を分ける際の基準を示した。本節では、この基準に依拠してジェウェットやカーエンが「原著の写し版」と判断した no. 94 について検討する。

no. 94 の表題頁には、スィプト著『時代の鏡』第 8 巻と記されている。また奥書には、アフマド・ブン・サルアーヤー Aḥmad b. Ṣal'āyā によって 794H 年サファル月 12 日に書写が完了していること、著者の歴史書がこの年 (654H 年)

で終わっていること、またこの歴史書については 711H 年に補遺 (*Dhayl* を指す) が作成されていること、さらにこの写本の基になった写本は 750H 年に要約 *ikhtiṣār* ⁽³³⁾ されたものの一部であることが記されている。

書名、書写者名、そして書写完了年のみに基づくならば、no. 94 を『時代の鏡』原著の写本と判断することも妥当であろう。書写者が奥書で「著者」と記しているが、本文中ではないため、先の基準には当てはまらない。しかし奥書には、no. 94 は「750H 年に要約されたものの写し」、と記されている。この一文は no. 94 が原著そのものを写した写本ではないことを示唆するが、ジェウェット、カーエン共にこの点には触れていない。

次に本文の記述形式・内容を検討する。まず(一)の基準について、no. 94 と記述範囲が重なり、グオによって『要約』に分類されている no. 81 を用いて比較 ⁽³⁴⁾ する。no. 81 の記述が始まる 577H 年の条を両者で比べると、no. 94, f. 117a l. 21 から始まる記事が

イブン・アルアスィールが彼の歴史書の中で以下のように述べている。すなわち、サーリフの病が悪化し、彼が衰弱した時、医師達は彼に少量のワインを勧めた。云々 ⁽³⁵⁾

と『完史』からの引用である旨を示している。これに該当する no. 81 の記事は f. 2a l. 14 から始まるが、『完史』からの引用である旨は記載されていない。しかし、(一)の基準で見た場合、両者の典拠明記にはあまり差がなく、この基準のみでは判断はできない。 ⁽³⁶⁾ ⁽³⁷⁾

次に(二)の基準について検討する。no. 81 は218葉つまり536頁あり、1頁の行数は23行である。そして 577～654H 年の77年間の出来事を含んでいる。従って、1年分の記述量は約160行となる。 ⁽³⁸⁾ 一方、no. 94 の 577～654H 年間における1年分の記述量は約96行となる。 ⁽³⁹⁾ よって、no. 94 は no. 81 の6割の記述量しかないことが分かる。

最後に(三)について。スィプトの発言を示す文言は、no. 94 では常に一人称であるのに対し、no. 81 では三人称である。例えば、586H 年の条において、no. 94, f. 129a l. 24～では

私は言った「既には私は 603H 年にアレッポにてイブン・アンナッハース ⁽⁴⁰⁾ Ibn al-Nahḥās と出会った。云々」

とあるが、no. 81, f. 52a l. 20～では

著者——神よ彼を嘉し給え！——曰く、「既には私は 603H 年にアレッポにてイブン・アンナッハースと出会った。云々」⁽⁴¹⁾
とあり、著者スィフトを示す文言が異なることが分かる。⁽⁴²⁾

また、no. 81 には 3 箇所一人称が使用されているが、いずれの場合もイブン・ハリカーンの引用を示す際に用いられている。彼はスィフトの一世代後の人物であり、その著書『貴顕死亡録 *Wafayāt al-a'yān*』において『時代の鏡』を参照した旨を述べている。またスィフトの名前の後に死者への祈願文を付していることから、彼が『貴顕死亡録』を著したのはスィフトの死後であった可能性が極めて高い。従って、スィフトが『貴顕死亡録』から何らかの情報を引用する可能性はなく、この一人称はスィフトの発言ではない。

以上、no. 94 を(一)～(三)の基準に照らし合わせて見た。(一)の基準ではあまり特徴が現れなかったが、no. 81 と合致する箇所にはほぼ必ず典拠明記があり、no. 94 の典拠明記が数において no. 81 に劣っているわけではない。(二)の基準では、[橋爪 2005]の比較による記述量の差は 3 倍であったが、この場合では 1.5 倍であり、その差は若干少なくなっている。しかし、no. 94 は no. 81 と比べるとやはり記述量で劣っている。(三)の基準では、著者を表す際の両写本の違いが明確にされた。no. 81 は『要約』の特徴である「著者を三人称」で記し、no. 94 は「一人称」で記している。よって no. 94 は『要約』とは異なる系統、すなわち no. 74 の系統に属す写本であると言えよう。

3. 「原著の写し版」再考

前節では no. 94 が『要約』写本とは異なる特徴を持つことを明らかにし、no. 74 と同一系統に属す写本であることを指摘した。特に基準(三)の、著者を一人称で記す方法は、no. 74, 94 を『要約』から区別する重要な特徴である。しかし、この 2 写本が「原著の写し版」であるというカーエンらの規定は正しいのだろうか。本節では、この疑問を解消すべく、no. 94 の有する「第 8 巻」という巻数の点から考察する。

先に、『時代の鏡』は 37 乃至 40 巻であったことを指摘した。これを踏まえて no. 94 の性格を規定する場合、以下の 3 通りが考えられる。

A：原著の写しである no. 94 が第 8 巻であることから『時代の鏡』は 8 巻構成だった

B：no. 94 の書写者が37乃至40巻あった原著を 8 巻にまとめた

C：no. 94 の元写本は原著ではなく、原著『時代の鏡』から作成された「抜粋版」である

まず A について、これはイブン・ハッリカーンやユーニーニーが唱える40巻乃至37巻とは大きく異なる数字である。またサハーウィーの見解を踏まえると、『要約』が『時代の鏡』の半分の4巻構成となるが、その可能性は殆どない。⁽⁴⁵⁾従って、A の可能性は低い。

次に B について、この場合、no. 94 は4～5巻分の内容を保持していることになる。確かに、同写本は159年間を扱っており、Ahmet 2907/d シリーズの写本と比べると3～5倍の範囲である。しかし、1年分に割かれる no. 94 の行数は Ahmet 2907/d シリーズの半分から5分の1と、情報量は格段に少ない。⁽⁴⁶⁾no. 94 が「原著の写し版」であり、『要約』が字義通り要約版であるならば、ユーニーニーは情報量の少ない本から情報量の多い要約版を作製したことになる。しかし、少から多を作成する場合に「要約」という語を使用するだろうか。やはり B の可能性も低いと見るべきだろう。⁽⁴⁷⁾

C について、no. 94 の分量が『要約』と比べて少ないことから、同写本が原著の内容をそのまま伝えている可能性は低い。従って、ユーニーニー以外の人物によって原著の要約版が作成され、その写本である可能性と、『要約』から抜粋版が作成され、その写本である可能性の二つが考えられる。⁽⁴⁸⁾そして、no. 94 の基となった写本が750H年に要約によって作成されたという記述から考えて、ユーニーニーの手を経ない原著からの要約版が作成され、その写しがno. 94であるということになろう。

いずれにせよ、カーエンらの見解は完全に否定されることになり、彼が「原著の写し版」とした no. 94 や Evkaf 分類の no. 36～47, 50, no. 63, 及び筆者が指摘した no. 74 の各写本は「原著の写し版」ではないという結論に達する。

4. 『時代の鏡抜粋版』

前節までの検討で no. 36～47, 50, 63, 74, 94 の各写本が「原著の写し版」ではないこと、『要約』とも異なることを示した。とはいえ、この系統に属す写本が『時代の鏡』ではないという結論には至らない。⁽⁴⁹⁾となると、ユーニーニーとは別人による要約乃至抜粋版が作成され、その系統に属す写本として存在してい

図 I : 写本系統

るという仮定が成り立つ。これまでの検討から、(図 I) のようになろう。no. 94 の奥書には、同写本に至るまでに少なくとも二段階の過程を経ており、また要約という語が用いられ、『時代の鏡』から作成されたこと、『時代の鏡補遺』作成の年が 711H 年であることが示されている。これらの情報から、no. 94 はユニーニー編とは別の要約版であるといえよう。ただ、同じ「要約」という用語では区別が出来ないので、この範疇の写本を『時代の鏡抜粋』(以下『抜粋』)と呼ぶ。

IV. 『要約』写本の確定

前章では『抜粋』写本の特徴を示したが、本章では『要約』写本についての考察を進める。

1. Li Guo の分類の再検討

先にグオが, Ahmet 2907/d シリーズの写本は『要約』であると断じていることを指摘したが、その理由は何か。⁽⁵¹⁾Appendix 1 を参照すると, no. 84 (BN arabe 5866) に付された註11に, 「その奥書に『要約』の第16巻との明示あり」とある。⁽⁵²⁾実際に no. 84 の奥書を参照すると, 上記の情報に加え, 第17巻に続き, 書写の日付が 721H 年ラビー第 1 月22日月曜日であり, 書写者はハキーミーであることが記されている。⁽⁵³⁾この書写者の筆跡は独特なので, 第17巻とされる no. 28 を見ると, 直ちに彼の書写と判明する。従って, ハキーミー書写の写本は一揃いであり, それらは『要約』であるという結論に達する。

グオがリストに挙げた写本の内, no. 25~28, 62, 84 の 6 写本は書写者が同じであることから, 『要約』と判断できる。しかし d シリーズの残りの no. 23, 24, 29 およびその他の no. 51, 78, 79, 81, 93, 95, 96, 107, 109, 111 の計13写本については別の基準によって判断する必要がある。現段階では, これらの写本全てを直接参照したわけではないので仮定を交えて判断するが, d シリーズは, カタログ上の分類が『要約』であること, その書写年代が非常に近く, また写本の形態もほぼ一致していることから一連の書写作業の成果と見なうること, そしてカーエンやグオの調査を信頼して, no. 23, 24, 29 そして d シリーズと見なされる no. 51 を『要約』写本と判断する。⁽⁵⁴⁾

だが, 筆者が参照した no. 78, 79, 81 の 3 写本は筆跡が明らかにハキーミーのものではなく, 書写年代, 形態, 書写者が一致しないため, 別の基準から判断する必要がある。

まず, no. 78 と 79 は, その書写者や書写年代, 行数から一揃いの写本と分かる。そして no. 79 の奥書に, 同写本が『要約』であるとの記載があり,⁽⁵⁵⁾グオがこの記述を基に『要約』と判断したことが分かる。しかし, no. 81 はその表題にも奥書にも『要約』であることを示す記述はない。そこで先の分類基準を基に検討する必要があるが, 既に第三章 2 節において no. 94 との比較の際に検討しており, その結果から『要約』と判断できる。⁽⁵⁶⁾

残りの 7 写本については今回参照出来なかったもので, カタログ上の分類からしか判断できないが, no. 95, 96 は『要約』と分類されており, 記述範囲と葉数から考えてもグオの判断は頷首できる。また no. 111 もカタログ上の分類は『要約』である。しかし, 残りの 4 写本については, 現段階ではグオの見解に基づ

かざるを得ない。⁽⁵⁷⁾

2. 『要約』写本の確定

次に、先の分類基準を基に、手許の写本から『要約』写本を確定していく。手許の写本の内、no. 30 を検討すると、f. 2b l. 21 に「著者曰く——神よ彼を嘉し給え！——」とある。また f. 3a l. 14 には「私は言った。すなわち以下に述べることは、著者——神よ彼を嘉し給え！——がその人物の伝記において述べたところの主な内容である」とある。前者の例はこれまでの検討と同じく、『要約』の可能性を示唆する。後者は「私は言った」とあり、一見すると『要約』ではない可能性を示唆するが、その後の文章は「以下は、著者——神よ彼を喜し給え！——」がその人物の説明において、述べたところの内容である」とあり、当該の一人称はスィフトではなく、彼の著作を参照して書いている人物を指すものと考えられる。

さらに同写本の4箇所⁽⁵⁸⁾に『貴顕死亡録』からの引用がある。前述のように『貴顕死亡録』はスィフト死後の作品であり、⁽⁵⁹⁾その作品からの引用が『時代の鏡』に記されているはずはない。従って、no. 30 は原著ではない。では何か。no. 30 とほぼ同じ記述範囲を持つ『要約』写本 no. 81 を見ると、no. 30 と同じ箇所に『貴顕死亡録』からの引用を示す記述が存在する。⁽⁶⁰⁾従って、no. 30 は『要約』と判明する。

次に no. 11~13, 60, 102 については no. 28 と同系統であることから『要約』と判断できる。⁽⁶¹⁾さらに、no. 11~13 と同じ Ahmet 2907/b に属す no. 7~10, 14, 15 も『要約』と判断できよう。⁽⁶²⁾

また、以下に述べる写本は、推測の域を出ないが、『要約』と判断できる。まず、no. 99 は、書写年、記述範囲が no. 27 に続くこと、形態の数値が近似であることから、Ahmet 2907/d と同系統、おそらく同一書写者による写本と考えられる。⁽⁶³⁾次に no. 46, 47, 83 は、既に『要約』と判明した no. 13, 14 と共に校訂本⁽⁶⁴⁾に使用されており、『要約』と判断して大過ないだろう。以上手持ちの写本から判明した『要約』は no. 7~15, 23~30, 46, 47, 51, 62, 78, 79, 81, 83, 84, 93, 95, 96, 99, 102, 107, 109, 111 の34写本となる。

V. 結びに代えて

さて、以上の検討に加えて『抜粋』に属す写本がどれに当たるのかを、分類基準を基に確定すべきであろうが、筆者の手許の情報では、決定的に足りないものが存在し、その確定を妨げる。『抜粋』の基準の内、「『要約』と比べて記述量が少ない」という項目がある。これは no. 74, 94 に関しては、該当記述範囲を比較する『要約』写本が手許にあり、それらとの比較の結果、記述量が少ないことから『抜粋』と断定することができた。しかし、それ以外の『抜粋』とされる no. 36~47, 50, 63 は手許になく確認できない。そこで以下では、手許の写本の中から『抜粋』に相当しそうな写本を抽出して検討する。

まず、no. 1, 16 を見ると、著者の発言が全て一人称で示されている。また著者は序文の直後の章で「私は 604H 年に師クンドウリー⁽⁶⁵⁾の許でイブン・ジャワリーキー Ibn al-Jawālīqī 著の『アラビア語訳された異国の言葉の書 *Kitāb al-mu'arrab min kalām al-A'jamī*』を講読した」と述べている。604H/1207-08 年は Sibṭ が23歳の年であり、この一人称をスィプトと考えるのが妥当である。また、様々な歴史書の内容を伝えているが、典拠明記は欠かしていない。よって、no. 1, 16 は『抜粋』と見なしうる。

次にno. 69を見ると、著者は自らの発言を一人称で記し、師ムワフファク al-Muwaffaq⁽⁶⁶⁾の許で学んだことを明記している。以上より、no. 69 は『抜粋』と見なしうる。

no. 75 では、著者の発言を一人称と三人称で併用しており、現段階では判別不能⁽⁶⁷⁾である。

最後に no. 76 をみると、やはり著者の発言は一人称であり、またイブン・アルジャウズィーからの直接伝聞の情報もあって、『抜粋』とみなしうる。⁽⁶⁸⁾⁽⁶⁹⁾

以上、no. 1, 16, 69, 75, 76 の各写本を検討した。これらの写本は著者を一人称で表し、イブン・アルジャウズィーや自らの師匠たちとの直接の関わりを示し、典拠明記が多いことなどから、『抜粋』の特徴を示している。しかし、これらの写本の記述範囲に相当する『要約』写本が手許にないため、その記述量の多少が判断できない。もし『要約』よりも少ないことが証明できれば、『抜粋』と確定できよう。

だが、記述量が『要約』よりも多いとなれば、これらは別の種類と考えなけ

ればならない。著者の発言が一人称であることや著者の師匠及びイブン・アルジャウズィーとの直接の関わり合いを示すなどの特徴は『時代の鏡』原著の写本の特徴ともなるため、『要約』より記述量が多い場合は、『時代の鏡』原著の写本という可能性を考慮する必要がある。

以上、『時代の鏡』とされる写本の書誌情報を示し、その記述形式や内容を検討してきた。その結果、二系統存在する『時代の鏡』写本それぞれの分類基準を定め、一方はユーニーニー編の『時代の鏡要約』、他方はこれまで「原著の写し版」と見なされてきた、不詳の書写者による『時代の鏡抜粋』という性格の写本群であることを解明した。

この結果から、『時代の鏡』の二系統の写本とは、実際には『時代の鏡』そのものの写本系統ではなく、『要約』と『抜粋』とされる二種類の写本群を示すものであったこと、また現在までに『時代の鏡』として歴史研究等に利用されてきた史料は、実際には『要約』であり『抜粋』であって、『時代の鏡』ではない⁽⁷⁰⁾という、二つの結論が導かれる。もちろん両者ともに『時代の鏡』の内容を伝えているが、スィフト死後の著作からの引用や内容の削除など、情報の増減があるため、両写本群の特徴を踏まえて利用する必要がある。

また、ジェウエット、カーエン、グオの「『要約』は、『時代の鏡』を要約したものではなく、増補・改訂したものである」という見解は、彼らが「原著の写し版」と見なしてきた写本群を「原著の抜粋版」と確定した本稿での検討により、否定された。

さらに、『要約』写本と判明した15写本を新たに加えたこと、『抜粋』の分類基準が『時代の鏡』自体の特徴とも重なることを指摘したことが本稿の成果として挙げられよう。

今後はこれらの成果を基に、更なる写本調査を行い、『時代の鏡』写本そのものの確定を行うことや二系統に分類した写本群の中での参照関係などを明らかにし、さらに詳しい写本系統を明らかにするなど、『時代の鏡』写本の全容解明を進めていく必要がある。

参考文献

Dhayl: al-Yūnīnī, *Dhayl mir'āt al-zamān*, 4 vols., Ḥaydarābād, 1960.

al-I'lān: al-Sakhāwī, *al-I'lān bi al-tawbikh li-man dhamma al-ta'rīkh*, Dimashq, 1349.

- al-Kāmil*: Ibn al-Athir, *al-Kāmil fī al-ta'rikh*, 13 vols., Bayrūt, 1965-1967.
- al-Muntazam*: Ibn al-Jawzī, *al-Muntazam fī ta'rikh al-mulūk wa al-umam*, 5-10 vols., Haydarābād-Decan, 1359.
- Wafayāt*: Ibn Khallikān, *Wafayāt al-a'yān wa anbā' abnā' al-zamān*, 8 vols., Bayrūt, 1977.
- Cahen, Cl. 1940: *La Syrie du Nord à l'époque des Croisades et la principauté franque d'Antioche*, Paris.
- Cahen, Cl. 1971: "IBN al-DJAWZĪ, SIBṬ," *ET*, Vol. 3, 752b-753a.
- GAL: Brockelmann, C., *Geschichte der arabischen Litteratur*, 5 vols., Leiden, 1937-49.
- 中町信孝 2003: 「バフリー・マムルーク朝時代史料としてのアイニーの年代記: ヒジュラ暦728年の記述を中心に」『オリエント』46/2, 134-160.
- 橋爪烈 2005: 「Münich 378^c 写本の著者・題名の確定: 『時代の鏡』諸写本との比較から」『オリエント』48/1, 140-153.

注

- (1) **L20**, 18. なお **L20** という表記については(表IV)の注記を参照。
- (2) 例えば, 361H/971 年(以下ヒジュラ暦/西暦の順で表記)から 447H/1056 年の間は, 現存しないヒラール Hilal al-Ṣābi' の歴史書に基づいて記され, 同書からの引用も多数含んでいる。こうした情報を歴史研究に利用するには, まずそれを保存する史料の性格を確定する必要がある。この点からも『時代の鏡』写本研究の着手が求められる。
- (3) 校訂本の情報については, (表IV)の **19a~g** を参照。
- (4) スィプトについては, GAL, G-I, 347, S-I, 589; Cahen, Cl. 1971, 752b-753a. を参照。
- (5) イブン・アルアスィール Ibn al-Athir (630H/1233 年没) 著の大年代記。
- (6) **L19-g**, 517-570.
- (7) **L19-g**, 514-515.
- (8) イェール大学図書館所蔵の写本。本稿で扱う写本は全て(表1)左端に記載した写本番号で示す。no. 94 は Yale Landberg 136 写本を意味する。表の説明は第II章4節を参照。
- (9) **L19-a**, p. viii. ただしどの『要約』写本を念頭においての発言かは不明である。
- (10) **L06**, 339.
- (11) Qutb al-Dīn Abū al-Faṭḥ Mūsā b. Muḥammad al-Yūnīnī, 640-726H/1242-1326
- (12) **L06**, 339-340.
- (13) Cahen, Cl. 1940, 64-66; Cahen, Cl. 1971, 752b-753a.
- (14) **L20**, I, 16-21, Appendix 1. Appendix 1 はグオが『要約』とした写本のリストである。それによると, no. 23~29 (Ahmet 2907/d シリーズ), 51, 62, 76, 79, 81, 84, 93, 95,

96, 108, 109, 111 の19写本が『要約』であるという。

(15) 橋爪烈 2005, 140-153.

(16) 巻数や書写者名、形態などの情報が欠けている場合が多く、また情報源毎に異なる情報を提示している場合もあり、確定情報ではないが、今後の写本調査により順次確定する予定である。情報源については(表IV)を参照。なおボードリアン図書館及びフランス国立公文書館所蔵の写本情報の一部は佐藤尚平氏、大塚修氏より頂いた。また大英図書館所蔵の写本情報は近藤信彰氏の仲介により東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所蔵のマイクロフィッシュを閲覧し収集した。またカイロ写本研究so所蔵マイクロフィルムの閲覧や情報提供は清水宏祐先生、小林正史氏、坂東和美氏にご協力頂いた。各氏には記して謝意を表すものである。

(17) 例えば番号26の写本情報 (no. 26) は、名称：トプカプ宮殿博物館図書館所蔵 Ahmet III 分類 2907/d 写本 (Ahmet III 2907/d), 巻数：10巻, 葉数：248葉, 書写年：ヒジュラ暦718年 (西暦1318年), 記述範囲：115～142H 年間の出来事及び死亡録, 形態：縦 25.5 cm×横 18 cm, 行数：1 頁につき21行, 書写者名：ハキーミー Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi, 備考：『要約』写本, となる。なお備考欄に (M) と括弧付きで記されている場合は、確実ではないことを示し, M, Aのいずれの文字もない場合は、判断保留を示す。

(18) 8H 世紀前半に, 717～724H 年に書写された写本群及び 732～735H 年に書写された写本群の二つの纏まりが見られる。この内前者の大半がハキーミーの書写であり, 書写者不明の写本についても, その書写年代や形態などから, 同一写本群に属するという推測が成り立つ。ここでは no. 23, 24, 29, 99 についてその可能性が指摘できる。

(19) 巻数不明の写本 (111写本中29写本) は記載していない。

(20) Ibn Khallikān, Abū al-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad, 608-681H/1211-1282

(21) 『時代の鏡』の巻数について, イブン・ハッリカーンは40巻説を (*Wafayāt*, III, 142), ユーニーニーは37巻説を唱える (*Dhayl*, I, 41)。またサハウィー al-Sakhāwī は, ユーニーニーが『時代の鏡』の約半分の『要約』を作成したと伝えている (*al-I'ṭān*, 146) (因みに no. 79 f. 127b. の『時代の鏡』の第16巻から, ユーニーニーによって要約された第8巻の最後』という奥書から, 『要約』が『時代の鏡』の半分であると確認できる)。イブン・ハッリカーンとユーニーニーの情報に食い違いがある。『要約』の作成者ユーニーニーが巻数を間違えるとも思われないが, 両者の参照した『時代の鏡』が異なる可能性もある。ともかく, 『時代の鏡』は37～40巻で『要約』は半分の18～20巻あったと考えられよう。

(22) 現存写本の内, 巻数の判明している写本は全て20巻以内の巻数である。このことは『時代の鏡』原著の写本が存在する可能性を低める。もちろん37乃至40巻中の第1, 12, 20巻などに相当する写本が存在する可能性はあるが, 21巻以上の巻数を有する写本の存在が確かめられないのは奇妙である。

(23) Evkaf 分類の内, no. 48 (v. 13), 49 (v. 14), 51 (v. 18) は書写年が他の写本とは異

なる。故に別系統の写本であり、no. 47 (v. 12) と no. 48 に重複する年代があるのも不自然ではない。

- (24) ジェウエットは、no. 94 は、『要約』として分類されるイエール大学図書館蔵の no. 95, 96 及び大英図書館やフランス国立文書館、ボードリアン図書館、ライデン大学図書館蔵の『時代の鏡』とは異系統の写本であるとする (L19-a, p. vii.) が、その基準は不明である。また、彼の見解に基づくカーエンも基準を示していない (L06, 339-340.)

- (25) (一), (二)については[橋爪 2005]を参照。(三)は、その後の調査で判明した点である。

- (26) wa kāna qad lahiya bi-al-rukūb fi al-layl wa ṭawf al-aswāq wa rattaba fi kull darbin aṣḥāb al-akhbār yuṭālī'ūna-hu bi-mā ya'rifūna-hu wa yasma'ūna-hu.....

- (27) wa qāla Hilāl b. al-Ṣābi' ḥaddatha-ni Abū Ishāq Ibrāhīm b. al-Khaḍar kāna al-Ḥākim qad lahiya bi-al-rukūb fi al-layl wa yaṭūf al-aswāq..... なお「市場を巡る」という部分が動名詞による表現か動詞による表現の違いはあるが(下線部)、文意は全く同じである。

- (28) no. 13, f. 1b l.9; no. 60, p. 255 l.22-; no. 102, f. 16b l. 6-.

- (29) これらの比較は、no. 74 の記述範囲 282~460H 年で集計し、対応する写本は、該当範囲を含む no. 11~13 で調査した。

- (30) hādha qawl Hilāl b. al-Ṣābi'

- (31) 橋爪烈 2005, 145. の註釈14を参照。

- (32) この祈願文は挿入されていないこともある。

- (33) no. 94, f. 1a, ff. 264b-265a.

- (34) グオは no. 81 が『要約』であるとするがその根拠は示していない。大英図書館の分類では『要約』になっており、また no. 94 との比較の過程で、no. 81 が『要約』の特徴を有していることが判明する。

- (35) ザンギー朝アレッポ君主 al-Malik al-Ṣāliḥ Ismā'il b. Nūr al-Dīn (d. 577H/1181) を指す。

- (36) 因みに、*al-Kāmil*, XI, 472 に同じ文章があり、スィプトが引用していることが判明する。

- (37) no. 81 の典拠明記は殆どの箇所と no. 94 と合致する。f. 166a l.12-, f. 171b l. 23- などが no. 81 で典拠明記無し箇所の箇所であるが、これ以外については見出せなかった。

- (38) $(536\text{頁} \div 77\text{年}) \times 23\text{行} = 160.1$ で約160行となる。

- (39) $(296\text{頁} \div 77\text{年}) \times 25\text{行} = 96.1$ で約96行となる

- (40) qultu wa qad ijtama'tu bi-bn al-Naḥḥās fi Ḥalab fi al-sanat thalāthin wa sittimī'a.....

- (41) qāla al-Muṣannif raḥima-hu Allāh wa qad ijtama'tu bi-bn al-Naḥḥās fi Ḥalab al-sanat thalāthin wa sittimī'a.....

- (42) 同様の事例は、no. 94: f. 133a l. 3-, f. 138a l. 22-, f. 149a l. 17-, f. 149b l. 10-, f. 149

- b l. 24-, f. 151a l. 8-, f. 154a l. 19-, それぞれに対応して no. 81: f. 58a l. 19-, f. 70b l. 14-, f. 92b l. 19-, f. 93a l. 17-, f. 93b l. 15-, f. 95b l. 11-, f. 101b l. 1- など多数存在する。
- (43) 註釈20を参照。
- (44) *Wafayāt*, III, 142, VI, 239, 353.
- (45) 註釈21の議論を参照。
- (46) no. 28 の 1 年分の行数は210行 [(500頁÷50年)×21行], これに対し no. 94 の 1 年分の行数は83.3行 [(530頁÷159年)×25行] であり, no. 28 の 5 分の 2 の記述量である。
- (47) カーエンやグオらは「原著の写し版」の記述量が少ないことから『要約』の性格付けにおいて「原著の増補・改訂」という見解を述べている。
- (48) no. 94, f. 265a.
- (49) no. 95 において, 著者がイブン・アルジャウズィーの死亡録に割いている分量が多いこと (約 9 葉) や, 自らの師クンドゥリー Tāj al-Dīn al-Kundurī (f. 101b p. 202) やアイユーブ朝スルタン, マリク・ムアッザム al-Malik al-Mu‘azzam ‘Īsā (d. 624 H/1227) (f. 149a p. 297) と直接会話している状況などが見られる。よって, この著者がスイプトであることは間違いない。
- (50) no. 94, ff. 264b-265a (pp. 528-529)
- (51) 註釈14を参照。
- (52) **L20**, I, Appendix 1.
- (53) no. 84, f. 243b.
- (54) (表 I) (表 II) の該当箇所および註釈14, 18を参照。
- (55) no. 79, f. 127b.
- (56) 第III章第 2 節を参照。
- (57) ただ no. 93, 107, 109 の 3 写本については, カタログ上の分類が『要約』ではなく, それぞれ『時代の鏡』, 『時代の鏡補遺』, そして『時代の鏡摘要 *mukhtār*』となっており, グオの判断を無条件に受け入れることはできない。今後の調査を期したい。
- (58) no. 30: f. 45a l. 3-4; f. 103a l. 15-16; f. 104a l. 21-22; f. 124a l. 7-8.
- (59) 第III章 2 節の分類(三)についての検討を参照。
- (60) 最初の箇所を除く 3 箇所に対応して, f. 60b l. 17-18, f. 62a l. 16, f. 88b l. 6-7 (全て no. 81) の部分に『貴顕死亡録』からの引用を示す記述があり, 文章もほぼ一致する。
- (61) 橋爪烈 2005及び第III章 1 ~ 2 節の議論を参照。
- (62) 記述範囲が連続していることと形態の数値がほぼ一致していることから判断した。
- (63) 註釈18を参照。
- (64) **L19-b** を参照。
- (65) 本稿では, 写本自体は検討できなかったが, 両写本を使用する校訂本 **L19-d** の情報に基づいて検討した。因みに, 校訂者のイフサーン・アッバース Iḥsān ‘Abbās は Ahmet 2907/a シリーズの第 2 巻 (no. 2) も使用しているが, それは第 1 巻と様々な面

で異なっており、特にスイフトの発言の際に「著者曰く」という文言を使用していると指摘している。従って、Ahmet 2907/a シリーズ全てが『抜粋』とは判断できない。

L19-d, 33-34.

- (66) no. 69, f. 179b.
- (67) no. 75. ex. f. 34b, 58b: qultu; f. 83b, 87b: qāla al-Muṣannif. また同写本中で、スイフトは師ムワフファクの許で学んだこと、イブン・アルジャウズィーからの直接伝聞の情報を伝えており『抜粋』と断定したいが、「著者曰く」という三人称の使用が確定を妨げる。
- (68) no. 76, f. 108a.
- (69) ただし、1 箇所 qāla al-Muṣannif と三人称で示されている。no. 76, f. 124. また同写本は全体的に汚れが酷く、判読不能な葉が多数存在するため、情報の質の面でも問題がある。
- (70) (表Ⅳ) **19 a~g** に付した使用写本番号（太字）を参照。

付記：本稿執筆後に在ダマスクスの柳谷あゆみ氏から『時代の鏡』と題する新たな校訂本がダマスクスで刊行されたとの情報を得た。*Mir'āt al-zamān fī tāriḥ al-a'yān: Le miroir du temps*, ed Juliette Rassi, Institut français du Proche-Orient, Damascus, 2005. 396-411H/1004-1021 年の校訂テキスト及び仏語訳とのことだが、使用写本や校訂範囲の設定理由などは、同書が手許にないため不明である。今後の調査を期したい。

表 I Mir'at al-Zamān 諸写本 基本情報

no.	略称	巻数	書写年	記述範囲	形態	書写者	備考
1	Ahmet III 2907/a	v.1	868-869H	序~Shu'ayb	27x17.5, 113		A ○ 06, 09, 11, 19-d
2	Ahmet III 2907/a	v.2	868-869H	Shu'ayb~古アラブ	27x17.5, 113		06, 09, 11
3	Ahmet III 2907/a	v.3 (243)343	868-869H	古アラブ~8H年	27x17.5, 113		06, 09, 11
4	Ahmet III 2907/a	v.4	868H	Ansār 第一世代	27x17.5, 113		06, 09, 11
5	Ahmet III 2907/a	v.5	869H	14-36H年	27x17.5, 113		06, 09, 11
6	Ahmet III 2907/a	v.8	868-869H	65-92H年	27x17.5, 113		06, 11
7	Ahmet III 2907/b	v.6	9Hth cent.	69-103H年(or 100H年)	27x17.5, 123		M 01, 06, 11
8	Ahmet III 2907/b	v.7	9Hth cent.	(101H年)104-146H年	27x17.5, 123		M 01, 06, 09, 11
9	Ahmet III 2907/b	v.8	9Hth cent.	147-199H年	27.5x18.5, 123		M 01, 06, 09, 11
10	Ahmet III 2907/b	v.9	9Hth cent.	200-255H年	27x17.5, 123		M 01, 06, 09, 11
11	Ahmet III 2907/b	v.10	9Hth cent.	256-329H年	27x17.5, 123		M ○ 01, 06, 09, 11
12	Ahmet III 2907/b	v.11	283(8)	330-404H年	27x17.5, 123		M ○ 01, 06, 09, 11
13	Ahmet III 2907/b	v.12	262	405-463H年	27x17.5, 123		M ○ 01, 06, 09, 11, 19-b
14	Ahmet III 2907/b	v.13	9Hth cent.	464-546H年	27x17.5, 123(24)		M 01, 06, 09, 11, 19-b
15	Ahmet III 2907/b	v.14	281	547-619H年	27x17.5, 123		M 01, 06, 09, 11
16	Ahmet III 2907/c	v.1	195(246)	序~Kālib(ör Yūnus)	27.5x18, 123		A ○ 01, 06, 09, 11, 19-d
17	Ahmet III 2907/c	v.3	874H(1469)	Yawn Badr~21H年	27x18, 125		(A) 01, 06, 09, 11
18	Ahmet III 2907/c	v.4	253(281)	22-47(8)H年	27x18, 125		(A) 01, 06, 09, 11
19	Ahmet III 2907/c	v.6	281	72-104H年	27x18, 125	Muhammad b. Ahmad al-'Ajami	(A) 01, 06, 11
20	Ahmet III 2907/c	v.7	263	105-159H年	27x18, 125	Abū al-Hasan 'Alī b. Hasan	(A) 01, 06, 09, 11
21	Ahmet III 2907/c	v.8	296	879-880H	160-217(8)H年		(A) 01, 06, 09, 11
22	Ahmet III 2907/c	v.13	395	880H(1475)	27.5x18.5, 125		(A) 01, 06, 09, 11
23	Ahmet III 2907/d	v.2	246	718-724H	25.5x18, 121	(Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi)	M 01, 06, 09, 11, 19-d, 20
24	Ahmet III 2907/d	v.5	228	718-724H	25.5x18, 121	(Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi)	M 01, 06, 11, 20
25	Ahmet III 2907/d	v.8	244	718H(1318)	25.5x18, 121	Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi	M 01, 06, 11, 20
26	Ahmet III 2907/d	v.10	248	115-142H年	25.5x18, 121	Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi	M 06, 11, 20
27	Ahmet III 2907/d	v.12	249	719H(1319)	188-218H年	Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi	M 01, 06, 11, 20
28	Ahmet III 2907/d	v.17	250	723H(1323)	401-450H年	Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi	M ○ 06, 11, 20
29	Ahmet III 2907/d	v.19	247	718-724H	490-561H年	(Ahmad b. al-'Alam al-Hakimi)	M 06, 11, 20
30	Ahmet III 2907/g	v.13	233	888H(1483)	25.5x18.5, 121	Muhammad b. Ahmad al-Shihabi	M ○ 09, 11
31	Ahmet III 2907/h	v.11	197	n.d.	261-324(6)H年		06, 11
32	Ahmet III 2931/1-4		415	9Hth cent.	36x22.5, 121		06, 11
33	Ahmet III 2931/5-8		395	n.d.	36x22.5, 121		06, 11
34	Ahmet III 2931/13-16		379	9Hth cent.	36x22.5, 121		06, 11
35	Ahmet III 2931/18		155	9Hth cent.	36x22.5, 121		06, 11

36	Evkat 2124	v.1	9Hth cent.	序~ Zakariya~7H年			A 01, 06
37	Evkat 2125	v.2	9Hth cent.	~29H年			A 01, 06, 09
38	Evkat 2126	v.3	9Hth cent.	30~50H年			A 01, 06
39	Evkat 2127	v.4	9Hth cent.	50~74H年			A 01, 06
40	Evkat 2128	v.5	9Hth cent.	65~110H年			A 01, 06
41	Evkat 2129	v.6	9Hth cent.	~179H年			A 01, 06
42	Evkat 2130	v.7	9Hth cent.	80~237H年			A 01, 06
43	Evkat 2131	v.8	9Hth cent.	237~310H年			A 01, 06
44	Evkat 2132	v.9	9Hth cent.	310~389H年			A 01, 06
45	Evkat 2133	v.10	9Hth cent.	390~463H年(459H年)	20x15, 127		A 01, 06, 19-b
46	Evkat 2134	v.11	9Hth cent.	463(459H)~560H年	20x15, 127		A 01, 06, 19-b
47	Evkat 2135	v.12	9Hth cent.	735H			01, 06
48	Evkat 2136	v.13	735H	450~558H年			01, 06
49	Evkat 2137	v.14	735H	569~614H年			01, 06
50	Evkat 2138	v.15	9Hth cent.	620~654(459H)年		(Muhammad al-Hanafī)	A 01, 06
51	Evkat 2141	v.18	724H	450~489H年	24.5x18, 121	Ahmad b. al-'Alam al-Hakīmī	M 01, 06, 19-b, 20
52	Feiz Allah 1520		n.d.	序~預言者Dā'ūd	27x18, 125		17
53	Feiz Allah 1521	230	n.d.	27~50H	26.5x17.5, 131		17
54	Feiz Allah 1522	391	9Hth cent.	49~68H	27x17, 123		17
55	Feiz Allah 1523		867H	330~400H	27x17, 121		17
56	Feiz Allah 1524	129	n.d.	591~654H	29.5x20.25, 123		17
57	Köprülü 1154	v.2	9Hth cent.	Qiṣṣa 'Azīr~7H年	27.5x18, 123		01, 09, 10, 13, 17
58	Köprülü 1155	v.4	9Hth cent.	9~31H年	26.5x16.5, 121		01, 09, 10, 13, 17
59	Köprülü 1156	v.9	732H(or 938H)	96~121H年	25.8x18.5, 116		01, 10, 13, 17
60	Köprülü 1157	v.11	228	358~439H年	25.5x18, 125		M 01, 10, 13, 17
61	Esad Efendi 2141	v.20	191	598~654H年	21.5x15.5, 117		10, 14, 17
62	Laleli 2100	v.1	717H	序~Shu'ayb		Ahmad b. al-'Alam al-Hakīmī	M 10, 14, 17, 20
63	Karaçelebizade 284	222	972H(or 982H)	282~466H年			A 06, 14
64	Süleymaniye 1641	v.20	288	不明			14
65	Hakim Öğün 801	v.1	1014H	序~Dhikr Yünân	21x14.5, 123	Hasan b. Mūsā al-Hanafī	01, 10, 17
66	Aya Sofia 3410		963H	序~7H	30x21, 125		17
67	Aya Sofia 3411		n.d.	95~131H	31x23.5, 115		17, 22
68	Aya Sofia 3412		n.d.	61~131H	35x24, 121		17
69	BL IO ISL 3221	v.4	867H(1462)	32~48H年	121	Muhammad al-Nastarāwī	○
70	BL Or 1510	271	8322H	Adam~Muhammad	11.17~19		○ 12
71	BL Or 4016	53	9Hth cent.	Misr~al-Rūm	1.19		○ 12, 19-d
72	BL Or 4215	245	9Hth cent.	序~nasab Muhammad	6.5x4.5inch, 131		○ 10, 12
73	BL Or 4618	254	19th cent.	218~279H年	125		○ 10, 12
74	BL Or 4619	259	19th cent.	282~460H年	125		A 01, 10, 12
75	BL Or 4893	148	1839 AD	Hazqiyāl~Mulūk Jāhiliyya	121		○ 10, 19-d
76	BL Or 9258	187	9Hth cent.	480~513H年	1.17		○

77	BL Add 9574/2	v.1,3,4	301	9Hh cent.	?137-632H年	l.19, l.25	Muhammad b. 'Alī al-Shāfiʿ	○ 10
78	BL Add 23275	v.7	145(6)	817H(1414)	56-74H年	l.19	Muhammad b. 'Alī al-Shāfiʿ	○ 10, 20
79	BL Add 23276	v.8	128(7)	817H(1415)	75-90H年	l.19	Muhammad b. 'Alī al-Shāfiʿ	○ 10, 20
80	BL Add 23277	v.7	294	1001H(1593)	72or73-149H年	l.33	Muhammad b. 'Alī al-Shāfiʿ	○ 10
81	BL Add 23279	Last	218	762H(1361)	577-654H年	l.23	Muhammad b. Ahmad al-Anṣārī	○ 10, 20
82	BN arabe 1505	v.6	227	971H(1564)	190-281H年	31x21, l.25		○ 10, 16, 18
83	BN arabe 1506	v.12	314	97Hh cent.	440-517H年	28x18, l.25		○ 10, 16, 18, 19-b
84	BN arabe 5866	v.16	243(4)	721H(1321)	358-400H年	26x18, l.21	Ahmad b. al-'Alam al-Ḥakīmī	○ 04, 05, 07, 10, 18, 20
85	BN arabe 5903		154	8Hh cent.	175-202H年	25x17		○ 04, 05, 07, 18
86	BN arabe 6131		313	8Hh cent.	59-89H年	27.5x19.5, l.30-31		○ 04, 10, 18
87	BN arabe 6132		326	8Hh cent.	95-149H年	27.5x19.5, l.31		○ 04, 18
88	BN arabe 6133		13	8Hh cent.	?-290H年	27.5x19.5		○ 04, 18
89	Bodleian 294		29	904H(1498)	pre Islam		'Izz al-Dīn Muḥammad b. al-Sinjābī	○ 10, 26
90	Bodleian 679	v.12	200	735H(1334)	327-449H年	l.21		○ 10, 26
91	Bodleian 682	v.4	151	n.d.	97-121H年			○ 10, 22, 26
92	Bodleian 723	v.6	194	n.d.	41-80H年			○ 10, 22, 26
93	Bodleian 759		144	937H/1530	480-533H年			○ 10, 20, 26
94	Yale Landberg 136	v.8	265	794H(1392)	495-654H年	30x19.5, l.25	Ahmad b. Sa'īyā al-Sayfī	○ A 10, 19-a, 24
95	Yale Landberg 137	v.13	219	869H(1465)	466-529H年	27x18.5	Muhammad al-Qurashī al-Nastarāwī	○ M 10, 20, 24
96	Yale Landberg 138	v.15	218	ca.1500 ?	590-654(-656)H年	28.5x20.5		○ M, Dhayl 10, 19-a, 20, 24
97	Escorial 1644(1639)	v.1	341	849H(1445)	序-Kalīb b. Yūkannā	28x18, l.19		○ 08, 10
98	Escorial 1645(1640)	v.9	186	n.d.	167-209/210H年	27x19, l.21		○ 08, 10
99	Escorial 1646(1641)	v.13	34	719H(1320)	218-253H年	26x18, l.21		○ M 08, 10
100	Escorial 1665(1660)	v.14	247	733H(1333)	235-270H年	26x17, l.17	(Ahmad b. al-'Alam al-Ḥakīmī)	○ 08
101	Münich or. 374	v.2	343	n.d.	10-14H年, 1-26H年	28x18, l.27		○ 03, 10
102	Münich Arab 378c		138	n.d.	402-436H年	27.5x18, l.21		○ M 03
103	Lieda 756 (834)	v.2	149	729H	include in Muḥammad			○ 10, 21, 22, 25
104	Lieda 757 (835)		227	734H	479-533H年			○ 10, 21, 25
105	Lindesiana Ar. 13		46pp	n.d.	7-27H年			○ 10
106	Gotha 1556	v.11-12	195	n.d.	136-217H年	26.5x19 l.19		○ 10, 21
107	Berlin 9442	(v.1)	241	ca.1100H	65-333H年	22x15, l.15-17	Mukhār 10, 20, 23	
108	Tunis (Roy) 4912		212	n.d.	50-112H年			○ 10
109	Suhaj 224 tarikh	v.2	192	8Hh cent.	58-74H年			○ M 20
110	Bankipore Ara. 966	v.2	339	15th cent.?	2-21H年	26.7x16.5, l.15		○ 22
111	Bankipore Ara. 967	v.1	134	18th cent.?	序-諸預言者伝	25.4x17.2, l.16-20		○ M 20, 22

表II Mir'at al-zamān 書写年代順

ヒジュラ世紀	写本番号・写本略称・巻数	書写年
7c (601H~)	61 Esad Efendi 2141-v.20	7Hth cent.
8c (701H~)	62 Laleli 2100-v.1	717H
	25 Ahmet III 2907/d-v.8	718H(1318)
	26 Ahmet III 2907/d-v.10	718H(1318)
	27 Ahmet III 2907/d-v.12	719H(1319)
	99 Escorial 1646(1641)-v.13	719H(1320)
	84 BN arabe 5866-v.16	721H(1321)
	28 Ahmet III 2907/d-v.17	723H(1323)
	23 Ahmet III 2907/d-v.2	718~724H
	24 Ahmet III 2907/d-v.5	718~724H
	29 Ahmet III 2907/d-v.19	718~724H
	51 Evkaf 2141-v.18	724H
	103 Lieda 756 (834)-v.2	729H
	59 Köprülü 1156-v.9	732H(or 938H)
	100 Escorial 1665(1660)-v.14	733H(1333)
	104 Lieda 757 (835)	734H
	90 Bodleian 679-v.12	735H(1334)
	48 Evkaf 2136-v.13	735H
	49 Evkaf 2137-v.14	735H
	81 BL Add 23279-v. last	762H(1361)
	94 Yale Landberg 136-v.8	794H(1392)
	64 Süleymaniye 1641-v.20	8Hth cent.
	85 BN arabe 5903	8Hth cent.
	86 BN arabe 6131	8Hth cent.
	87 BN arabe 6132	8Hth cent.
	88 BN arabe 6133	8Hth cent.
	109 Suhaj 224 tarih-v.2	8Hth cent.
9c (801H~)	78 BL Add 23275-v.7	817H(1414)
	79 BL Add 23276-v.8	817H(1415)
	70 BL Or 1510	832?H
	97 Escorial 1644(1639)-v.1	849H(1445)
	69 BL IO ISL 3221-v.4	867H(1462)
	55 Feiz Allah 1523	867H
	4 Ahmet III 2907/a-v.4	868H
	5 Ahmet III 2907/a-v.5	869H
	95 Yale Landberg 137-v.13	869H
	1 Ahmet III 2907/a-v.1	868~869H
	2 Ahmet III 2907/a-v.2	868~869H
	3 Ahmet III 2907/a-v.3	868~869H
	6 Ahmet III 2907/a-v.6	868~869H
	17 Ahmet III 2907/c-v.3	874H(1469)
	18 Ahmet III 2907/c-v.4	879H(1474)
	19 Ahmet III 2907/c-v.6	879H(1474)
	20 Ahmet III 2907/c-v.7	879H(1474)
	16 Ahmet III 2907/c-v.1	879~880H
	21 Ahmet III 2907/c-v.8	879~880H
	22 Ahmet III 2907/c-v.13	880H(1475)
	30 Ahmet III 2907/g-v.13	888H(1483)
	110 Bankipore Ara. 966-v.2	15th cent.?
	7 Ahmet III 2907/b-v.6	9Hth cent.
	8 Ahmet III 2907/b-v.7	9Hth cent.
	9 Ahmet III 2907/b-v.8	9Hth cent.
	10 Ahmet III 2907/b-v.9	9Hth cent.
	11 Ahmet III 2907/b-v.10	9Hth cent.

表III Mir'at al-zamān 諸写本 (巻数別区分)

Vol.	A 列		B 列		C 列		D 列		E 列		F 列		G 列	
	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲
I	Ahmet 2907/a	序-Shu'syb	Ahmet 2907/c	序-Kalib	Ahmet 2907/c	序-Kalib	Lahit 2100	序-Shu'syb	Evkat 2124	序-			Hakim Ogta 801	序-Yunan
II	Ahmet 2907/a	Shu'syb-古アラブ					Ahmet 2907/d	Shu'syb-古アラブ	Evkat 2125	Zakariya-7H			Kopula 1154	*Asir-711
III	Ahmet 2907/a	古アラブ-4H			Ahmet 2907/c	badr-21H			Evkat 2126	-29H				
IV	Ahmet 2907/a	Ahmad 著-15代			Ahmet 2907/c	22-71H			Evkat 2127	30-50H			Kopula 1155	9-31H
V	Ahmet 2907/a	14-36H					Ahmet 2907/d	13-36H	Evkat 2128	50-104H				
VI			Ahmet 2907/b	69-103H	Ahmet 2907/c	72-104H			Evkat 2129	65-110H				
VII	Ahmet 2907/a	65-92H	Ahmet 2907/b	104-146H	Ahmet 2907/c	105-159H	Ahmet 2907/d	65-92H	Evkat 2130	80-237H			Kopula 1156	96-121H
IX			Ahmet 2907/b	147-199H	Ahmet 2907/c	160-217H			Evkat 2132	237-310H				
X			Ahmet 2907/b	200-255H			Ahmet 2907/d	115-142H	Evkat 2133	310-389H				
XI			Ahmet 2907/b	330-404H					Evkat 2134	390-463H	Ahmet 2907/h	261-324H	Kopula 1157	358-439H
XII			Ahmet 2907/b	405-466H	Ahmet 2907/c	521-654H			Evkat 2135	463-560H				
XIII			Ahmet 2907/b	464-546H			Ahmet 2907/d	188-218H	Evkat 2136	450-538H	Ahmet 2907/g	561-654H		
XIV			Ahmet 2907/b	547-619H			(Escorial 1641)	(218-253H)	Evkat 2137	569-614H				
XV									Evkat 2138	620-654H				
XVI							BN arabe 5866	338-400H						
XVII							Ahmet 2907/d	401-450H						
XVIII							Evkat 2141	430-489H						
XIX							Ahmet 2907/d	490-561H					Esad Efendi 2141	598-654H
XX													Sulemamyte 1641	71-654H

Vol.	H 列		I 列		J 列		K 列		L 列	
	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲	写本略称	記述範囲
I	BL Or 4893	Muḥit Jāhilya	Escorial 1644	序-Kalib	Berlin 9442	65-333H	Bankpore 967	序-諸語言書伝	BL Add 95742	58-74H
II			Munch or 374	1-26H	Lucia 756 (834)	Muhammad	Bankpore 966	2-21H	Subaj 224	
III									BL Add 95742	
IV	BL IO JSL 3221	32-48H	Bodleian 682	97-121H						
V										
VI	BN arabe 1505	190-281H	Bodleian 723	41-80H						
VII	BL Add 23275	56-74H	BL Add 23277	72or73-149H						
VIII	BL Add 23276	75-96H	Landberg 136	495-654H						
IX			Escorial 1645	167-209H						
X										
XI										
XII	BN arabe 1506	440-517H	Bodleian 679	327-420(450)H	Gotha 1556	136H-				
XIII	Landberg 137	466-529H	Escorial 1646	218-253H	Gotha 1556	-217H				
XIV			Escorial 1665	235-270H						
XV	Landberg 138	590-654H								
XVI										
XVII										
XVIII										
XIX										
XX	BL Add 23279	577-654H年								

表IV 写本情報源リスト

01	Sibt Ibn al-Jawzī - al-Qutb al-Yunīnī, <i>Majallat al-Maimū' al-'Ilmī al-'Arabi</i> 22, Dimashq, 371-377
02	Aumer, J. 1970, <i>Die arabischen Handschriften der K. Hof- und Staatsbibliothek in München</i> , Wiesbaden
03	Aumer, J. 1970, <i>Verzeichnis der Orientalischen Handschriften der K. Hof- und Staatsbibliothek in München mit ausschluß der Hebraeischen, Arabischen und Persischen</i> : nebst Anhang zum verzeichniss der Arabischen und Persischen Handschriften, Wiesbaden
04	Blochét, E. 1925, <i>Catalogue des manuscrits arabes des nouvelles acquisitions (1884-1924)</i> , Paris
05	Blochét, E. 1900, <i>Catalogue de la collection de manuscrits orientaux, arabes, persans et turcs</i> , Paris
06	Cahen, Cl. 1936-v, <i>Les Chroniques Arabes Concernant la Syrie, L'Égypte et la Mésopotamie de la Conquête Arabe a la Conquête Ottomane dans les Bibliothèques D'Istanbul</i> , "Revue des Études Islamiques", 333-362
07	Derenbourg, H. 1901, <i>Les Manuscrits Arabes de la Collection Schæfer -- à la Bibliothèque Nationale</i> , Paris
08	Derenbourg, H. 1928, <i>Les Manuscrits Arabes de L'Escurial</i> , Tome III, Paris.
09	Sayyid, F. 1954-59, <i>Fihris al-Makhtū'āt al-Misawwara</i> , Vol 2-1, al-Qahira
10	Gabrieli, G. 1916, "Appunti Descrittivi e Critici. Su Alcuni Manoscritti Arabi di Contenuto Storico," <i>Rendiconti della Reale Accademia dei Lincei : Classe di Scienze Morali, Storiche e Filologiche</i> , Serie Quinta XXV, Roma, 1135-1188
11	Karaay, F.E. 1966, <i>Topkapı Sarayı Müzesi Kutuphanesi Arapça Yazmalar Kataloğu</i> , c. III, Istanbul
12	Rieu, Ch. 1894, <i>Supplement to the Catalogue or the Arabic Manuscripts in the British Museum</i> , Oxford U P
13	Sheshen, R. 1986, <i>Catalogue of Manuscripts in the Kuprulu Library</i> , Vol 1, Istanbul
14	Sheshen, R. 1975-82, <i>Nawādir al-Makhtū'āt al-'Arabiya fi Maktabāt Türkiye</i> , Vol 2, Bayrūt
15	Ritter, H. 1959, <i>Makhtū'āt ta'rikh 'arabiya fi makātib Istanbūl lam tuḥba' ba'd, Mā sāhama bi-hi al-mu'arrikhūn al-'arab fi al-mi'a al-sana al-akhira fi dirāsan al-ta'rikh al-'arabi wa ghayri-hi</i> , Bayrūt, 160-173.
16	De Slane, 1883-95, <i>Catalogue des Manuscrits Arabes de la Bibliothèque Nationale</i> , Vol 1, Paris.
17	Spies, O. 1932, <i>Beiträge zur Arabischen Literatur-Geschichte : Juristen, Historiker, Traditionarier</i> , Leipzig. (in Fuat Sezgin, <i>Traditionarier</i> , Leipzig. (in Fuat Sezgin, <i>Beiträge zur Erschliessung der Arabischen Handschriften in Istanbul und Anatolien</i> , Dritter Band, Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften an der Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main, 1986)
18	Vajda, G. 1953, <i>Index Général des Manuscrits Arabes Musulmans de la Bibliothèque Nationale de Paris</i> , Paris.
19	Sibt b. al-Jawzī, <i>Mir'āt al-zamān fi ta'rikh al-a'yān</i> a. Mir'āt az-zamān (A.H. 495-654), ed. J.R. Jewett, Chicago, 1907 no.94 b. Mir'ātu'z-zaman fi tarihi'l-āyān, ed. Ali Sevim, Ankara, 1968 no.13, 14, 46, 47, 83 . c. Mir'āt uz-zamān or The Mirror of the Age. Vol VIII, Pt I-II, 2 vols, ed. the Darat-ul-Maarifil-Osmania, Hyderabad-Decan, 1951. no.94 . d. al-sifr al-awwal min Mir'āt al-zamān fi ta'rikh al-a'yān, ed. Ihsān 'Abbās, Dār al-Shurūq, Bayrūt, 1985 no.1, 2, 16 . e. Mir'āt al-zamān fi ta'rikh al-a'yān al-Hiqba 345-447H, ed. Janān Jalil Muḥammad al-Hamūnadi, al-Dār al-Wataniya, Baghdad, 1990. no.74 . f. Mir'āt al-zamān fi ta'rikh al-a'yān : 481-517/1088-1123, ed. Musaffar b. Salīm, 2vols, Jāmi'a Umm al-Qurā, Makka, 1987. no.14, 15, 83, 94 . g. Muntakhbat min kitāb mir'āt al-zamān, in <i>Recueil des historiens des Croisades</i> , Tome III, ed. E. Dauter, Paris, 1884, 517-570. (no. 83, 93, 104)

20	Guo, L. 1998, <i>Early Mamluk Syrian Historiography : Al-Yūnīnī's Dhayl Mir'āt al-Zamān</i> , Vol. 1, Leiden.
21	Pertsch, W. 1881, <i>Die Arabischen Handschriften der Herzoglichen Bibliothek zu Gotha</i> , Vol.3, Gotha.
22	anon 1994, <i>Catalogue of the Arabic and Persian Manuscripts in the Khuda Bakhsh Oriental Public Library</i> , Vol. 15 (Arabic Manuscripts) History, Patna.
23	Ahlwardt, W. 1897, <i>Die Handschriften-Verzeichnisse der Königlichen Bibliothek zu Berlin : Einundzwanzigster Band. : Verzeichniss der Arabischen Handschriften</i> , Vol. 9, Berlin
24	Nemoy, L. 1956, <i>Arabic Manuscripts in the Yale University Library</i> , Yale UP
25	Voothoeve, P. 1980, <i>Codices Manuscripti VII : Handlist of Arabic Manuscripts in the Library of the University of Leiden and Other Collections in the Netherlands</i> , second ed., Leiden UP.
26	Uri, Johannes 1787, <i>Bibliothecae Bodleianae codicum manuscriptorum orientalium, videlicet hebraicorum, chaldaicorum, syriacorum, aethiopicorum, arabicorum, persicorum, turcicorum, copticorumque catalogos</i> , Pars prima, Oxford, pp.89, 153-154, 161, 167-168.
	以上の書誌の左にある番号 (01-26) にLを付した形で、本文及び註釈中の書誌情報を示している。例えば、L19-aとあれば“Mir'āt az-zamān (A.H. 495-654),” ed. J.R. Jewett, Chicago, 1907を指し、巻数、頁数はその後ろに記した。ex L19-a, 265 また、(表1) の備考欄にはLがない形で示している。 なお、Mir'āt al-zamān校訂本の書誌末尾には、校訂に使用された写本番号を付した。 ex “Mir'āt az-zamān (A.H. 495-654),” ed. J.R. Jewett, Chicago, 1907. no.94